

アンモニアガス可視化

赤外線・AI 理研計器、漏えい特定

理研計器はSoilook（高松市、西藤翼社長）と、アンモニアのガス漏えい可視化システムを開発した。アンモニアは脱炭素燃料としての需要拡大が見込まれる一方、毒性や可燃性から厳重な管理が必要となるが漏えいしても目に見えず、近づく濃度によって死に至る危険がある。可視化システムは赤外線検知とAI（人工知能）判定により、遠隔でガスの存在を把握し色の濃淡で表示する。実証試験を行い2028年夏に市場投入する。



検知システムが捉えた
ガス漏えいの映像

アンモニアは石炭火以降の低炭素電力とし
力発電での混焼が30年一て貢献することや、新

たな船舶燃料として世界的に需要が増えたとされる。それに伴い、燃料タンクや港湾での荷揚げ施設、船舶内の安全対策がより重要となる。

開発したシステムは複数の定置式ガス検知器を最大30台離れた赤外線カメラで撮影し、漏えい箇所を特定する。

AIでガスの存在の確度を判定し、これを一定間隔で色の濃淡によりモニターに表示して警報する。海外メーカーのシステムはあるが、価格は数千円で

検知器とカメラが対応の仕様となっており設置の制約となっている。西社は22日から東京ビッグサイト（東京都江東区）で開催される「Sea Japan 2026」に出展し、28年夏の発売を目指す。実サイトでの検証を行い、改良を行う。27年秋に量産試験をはじめ、国際的な安全指標を満たした上で、